七川祭の奴振

湖西随一の大祭といわれる七川祭は、高島郡新旭町大字安井川 844番地に鎮座する大荒比古神社の例祭で、毎年５月10日に大勢の観客を集めて盛大に行われます。この日の呼び物は華やかな奴振（的練）と勇壮な流鏑馬の神事で、奴振は昭和33年11月３日に県選択無形民俗文化財に選ばれています。

大荒比古神社は式内社で、主祭神は豊城入彦命と大荒田別命の二神で、配祀神として、佐々木源氏の祖神である少彦名命、仁徳天皇、宇多天皇、敦実親王の４神を合祀しています。

氏子地区は、新旭町内の井ノ口、安養寺、川原市、北畑、新庄、平井、堀川及び安曇川町の十八川を加えた元８ヶ村であります。

大荒比古神社（神殿）

祭の由来

近江の守護佐々木信綱の３男高信が、高島郡田中郷の地頭職であった嘉禎元年(1235)に、本領佐々木における累代奉祀の４神を勧請して当神社に合祀し、以来清水山城を本拠として郡内に勢力を張っていた。代々の城主は当神社を深く崇敬し、出陣の際には武運長久を祈願し、戦勝の時には御礼として、12頭の馬と12基の的を神前に奉納したのが、この祭のはじまりだと伝えられています。

祭の進行

例祭には「渡し番」といって、元８ヶ村が毎年輪番に祭礼諸行事の執行に当りますが、当番の村では４月３日の「神武さん」から祭の準備にかかります。的練りの練習もこの日から始められ、５月８日までの約１ヶ月間続けられます。

５月９日は「よみや」で、神社では宵宮の祭典があり、当番の村では、的練り奴が「よみや練」を行い、最後に「的預け」の一練りを披露して終ります。

５月10日の例祭当日は、14名の奴たちは早朝より集会所に勢ぞろいし、本日の奉仕者一同と共に先ず祝盃を上げます。集会所前で一練り、村外れでも一練りした後、警固、唐丁、的練り奴、鉾警固、傘鉾、鉦、太鼓、役馬（素走、流鏑馬、弓持）の順に行列を整えて神社へ向います。

的練り奴は、的練りが12人、樽振りが２人で、その日の服装は、肌襦袢の上に藤色の半纏、背中の紋は佐々木源氏の四つ目の家紋、脚絆に黒足袋、草鞋ばき、腰には扇子、瓢簞煙草入、まり等を飾り、その他豆しぼりの手拭、「寿」と紅でかいた四ツ折半紙を挟むと

勢ぞろいした的練り奴

1987. 10. 30

財団法人　滋賀県文化財保護協会

奴（正面）

奴（背面）

樽振り奴

いった華やかなものです。

神社までの順路は昔の仕来り通りに進み、途中宮元の井ノ口村の村はずれで休憩し、8つの村がそろうのを待ちます。

全部の村がそろえば、神社へ向って進みます。途中お旅所の山王さん（日枝神社）の前で「山王さんの礼練」を行い、更に進んで井ノ口村の中央の広場では、大きな石の上に置かれた「神御供」の前で「神御供の礼練」を行います。「神御供」の内容は、へぎの台にのせられた赤飯と生ぶき2本、干鮎2尾で極めて素朴な海と山の幸であります。

これが終ると行列は大宮の馬場尻にて休憩しますが、その頃大宮の神前では例祭の式典が厳かに行われています。

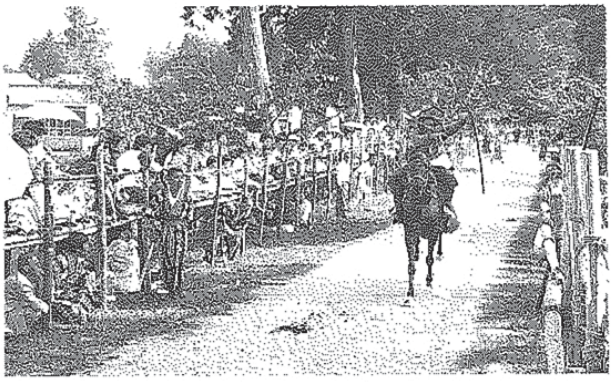
祭典が終ると社前の石段下に蓆を敷いて「神御供の式」が行われます。これには氏子総代や神官及び川原市鍛冶の代表が参列して、濁酒とお下りの神御供を頂きます。

式が終ると「馬の宮参り」が始まります。先祖伝来の豪華な馬具に飾られた馬が、流鏑馬を先頭に次々と拝礼します。昔は百頭位の馬が出たといわれますが、実に豪壮華麗なものであったと思われます。

宮参りの後はいよいよ「馬駆け」です。その頃には長さ 300m程の馬場の両側には、見物客が一ぱいで、その中を先ず裃に威儀を正した「素走」が駆け上って露払いをします。次いで「流鏑馬」が遠く神前に向って「扇の手」を奉納します。金襴の狩衣に綾藺笠をかぶり、左手には矢をつがえた滋籐の弓を持ち右手には、日の丸と佐々木の家紋四ツ目を両

神御供の式

流鏑馬の「扇の手」馬場尻にて行う



流鏑馬の騎射

面に置いた豪華な金扇を持ち、馬上に踏んばって、この扇を頭上高く掲げ、右左、裏表とひるがえす姿は誠に壮観であります。

「扇の手」が終ると流鏑馬は駆上る。途中１、２、３の的に向って矢を放つのであるが、今はすべて投げ矢です。３回駆上ると、次は各馬の競馬が始まり、祭は正に最高潮となります。各馬が３回駆け終ると、観客はそろそろ帰り始めます。

その頃から２の的と３の的との間で、奴たちが「扇練（おうぎねり）」を行います。これは的の代りに扇子を持って練るもので、神前に最後の御礼を申し上げる意味を持っています。

「扇練」がすむと８本の傘鉾は鉦や太鼓の囃（はや）しと共に行進を始め、30段の石段を駆上ってから拝殿を一周し、再び下って所定の場所に鉾をつなぎます。

続いて神輿の渡御です。昔は大法寺山の急坂を担ぎおろして御旅所の日枝神社に安置し、更に横馬場での競馬が奉納されたのですが、今では馬場を往復するだけで拝殿におかえりになりますと、さしもの大祭も目出度く千秋楽となります。

奴振（当地では的練といっています）

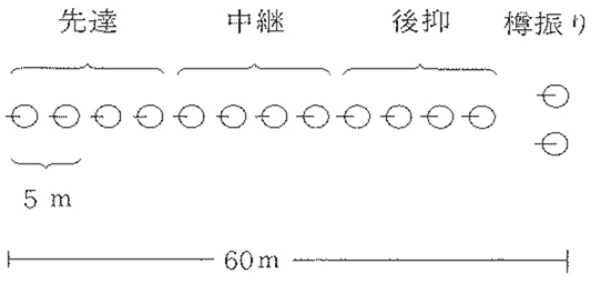
１．練りの種類

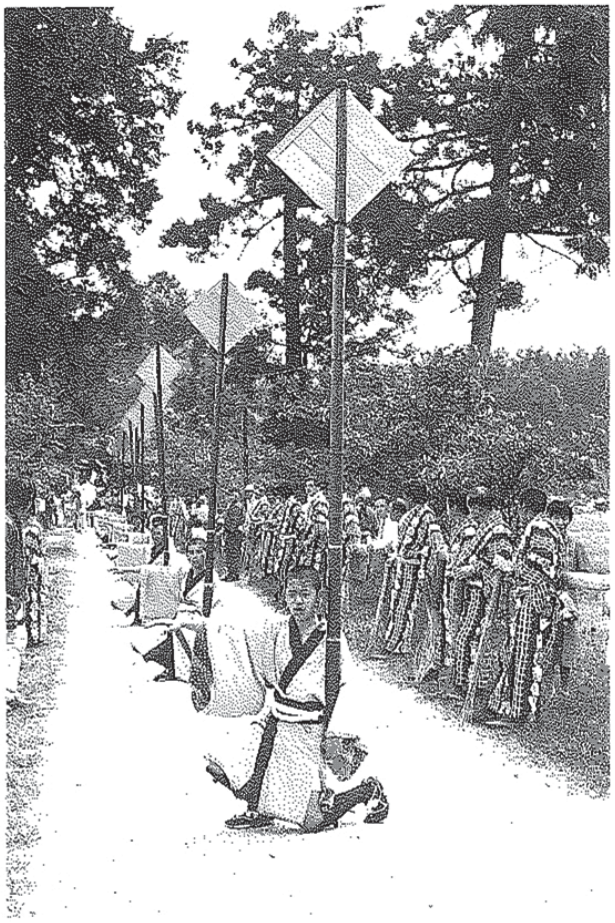
○普通の練り　　出発の時、村はずれ、馬場の１と２の的の間などで練る。

○礼練り　　御礼、拝礼の意味で、区長、山王さん、神御供の礼などに練る。

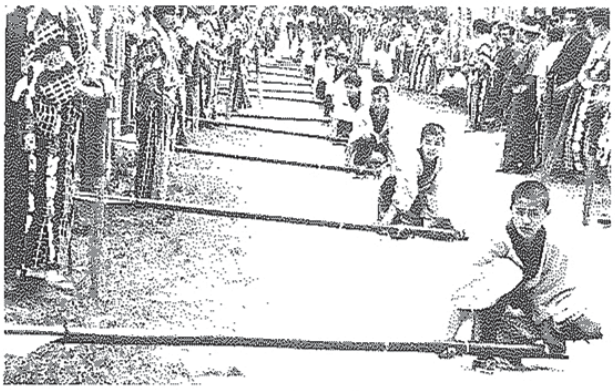
○扇練り　　最後に２と３の的の間で、神前に御礼言上の練り

２．奴の区分と隊形





奴　振（的練り）



礼　練　り

扇　練　り

３．的と樽

的は３ｍ程の青竹の先を割り、一辺が50cm程の正方形の薄い杉板を合せたものを黒縄でくくる。樽は飾り樽で、天狗とお多福の面を御幣に取りつけます。

的練の的は、氏子６ヶ村は左手で持ち、鉾の色は赤ですが、宮元の井ノ口と新庄城のあった新庄の２ヶ村だけは、的を右手に持ち、鉾は白です。その理由は、この２ヶ村は殿様から帯刀を許されていたので、的を左手に持つと刀が邪魔になるからだといわれています。

４．的練の唄

役唄と雑唄がありますが、各村毎にそれぞれ独特のものがあります。例えば元川原市村では次の通りです。

イ．役唄

○若宮の礼（けいこ上げの唄）

ながながの　けいこも終り　今宵はめでたきけいこ上げ　これより御礼申します

○宵宮練（的預けの唄）

めでたくすんだうれしさに　的、樽お役へ預けおき　奴はわが家へ帰ります。

○区長の礼（的もらいの唄）

的12　樽１荷　うち揃い　めでたく練り出す　おん役へ　これより御礼申します。

○村別れ

姉さんここでと言うたれど、人数が多くてはずかしや　心をここへと残し置き　奴はお宮へ上ります。

○山王宮の礼

一の森は山王の　お宮へ近き奴めが　これより　御礼申します。

○みごくの礼

高砂の　松葉へ近く　鉾をあとへと揃えたて　みごくの御礼申します。

○大宮の礼(扇練、千秋楽の唄)

長々の願いもかない　日がらもよくて　めでたさの　ここぞ名残りの千秋楽

ロ．雑唄

姉さんお前は瀬田川の　水面にただよう秋の月、奴は聞きます　三井の鐘

姉さんお前は比叡の山　日吉の社　志賀の宮奴ももうでる　比叡山

姉さんお前は舞子浜　白砂青松　びわの橋奴ものります　湖西線　（以下省略）

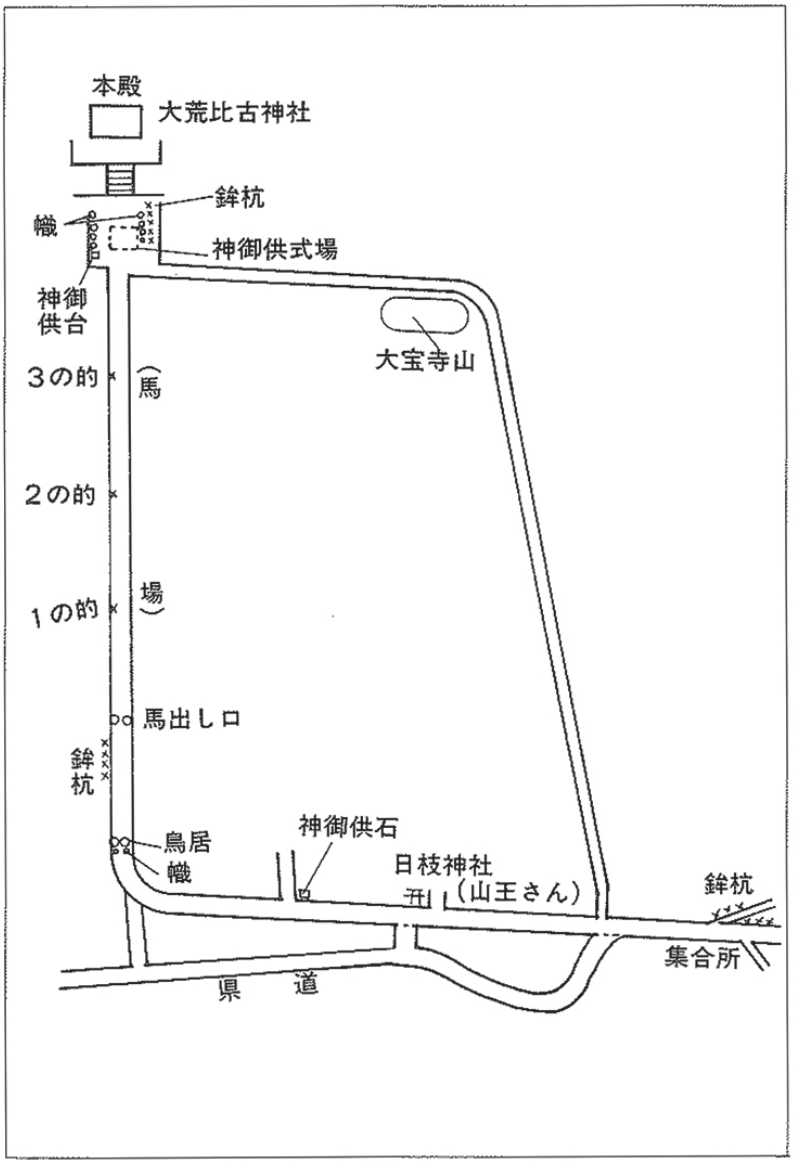
５．樽振の警句、ギャグの例

○姉さんもっと寄っといで　今日の奴は色男

○今日の奴と簪は　いかな女もさしたがる

○隣の若嫁さん毎晩さしてるそうな　生花を

（桑原　八郎氏　提供）



集合地から神社までの見取図